

地域劇団と公立文化施設の協働が生み出す「わが町の劇場」
— 三股町立文化会館と劇団こふく劇場を事例として —

五島 朋子

‘Our Own Theatre’ Generated by the Collaboration Between Regional Theatre
Company and Public Cultural Hall

A Case Study on Mimata Town Cultural Art Center and Kofuku Theatre Company

GOTO Tomoko

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要） 第16巻 第2号 抜刷

REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol.16 / No.2

令和2年 1月 31日発行 January 31, 2020

地域劇団と公立文化施設の協働が生み出す「わが町の劇場」

三股町立文化会館と劇団こふく劇場を事例として

五島朋子*

‘Our Own Theatre’ Generated by the Collaboration Between Regional Theatre Company and Public Cultural Hall

A Case Study on Mimata Town Cultural Art Center and Kofuku Theatre Company

GOTO Tomoko*

キーワード：公立文化施設，劇団，官民協働，フェスティバル，まちドラ！

Key Words: Public Cultural Hall, Regional Theatre Company, Public-Private Collaboration, Theatre Festival, Machi-Dora!

I. はじめに

本稿の目的は、公立文化施設と地域の演劇活動団体との持続的な協働の実例を検討することで、地方都市における創造機能を持つ劇場の一つのモデルを提示することである。

コンサートや、演劇・ダンスなど舞台芸術を上演できるホール（舞台設備と観客席）を持つ「公立文化施設」が、自治体により全国各地に多数整備されてきた。その数は、自治体数を上回る。しかしこれらの公立文化施設は、例えばドイツの各地に存在する公共劇場やアメリカの多数の地域劇場と異なり、舞台作品を創造するための専門人材や仕組みを内包しておらず、建築計画を専門とする清水裕之はそれを公立文化施設における創造機能の三つの外部依存性と呼んだ（1999, 108-109）。一つは、創造活動の外部依存である。公立文化施設のホールで行われる事業の9割は貸館によるもので、つまり施設の外で製作・創造された事業である¹。二つめは、芸術組織の外部依存である。舞台芸術を創造するための組織、例えば劇団、楽団、舞踊団、制作組織などの芸術家や専門家が雇用されておらず、舞台作品を創造するためには、外部の人材や組織に頼らねばならない。三つめは、公立文化施設には作品創造に必要な稽古場、道具を製作し保管するための作業場や倉庫などが不十分で、創造活動のための空間を外部に依存し

ている。

2012年に施行された「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律」前文は、劇場は文化を継承・創造・発信することによって、「活力ある社会を構築するための役割」を担っていると謳う。そのような役割を公立文化施設が果たすためには、外部化された創造機能を地域内外の多様な関係組織と連携・協働しながら補完し、創造活動を生み出していく必要があるだろう。

公立文化施設と芸術組織との連携では、例えばプロの交響楽団が公立文化施設に活動拠点を置き、一定の契約のもとに連携を行う実践例が関東圏だけでなく地方都市でもみられるようになっており²、事例研究や（赤木 2013, 2017）提携モデルの検討および課題の整理が行われている（赤木 2006）。しかし、演劇団体と公立文化施設の連携については、網羅的な調査もなされておらず、またオーケストラや演奏団体に比べ、劇団など演劇創造を担う組織は、日本では専門的な職業として成立しにくく活動の継続が困難なこともあり、とりわけ地方都市の演劇団体の活動実体を把握することすら困難な状況である。

したがって、演劇団体と公立文化施設との持続的な連携の実践例がそもそも限られているが、例えば、三重県文化会館と演劇人が運営する民間劇場との連携に関する事例報告（冨本 2012）では、連携に

*鳥取大学地域学部国際地域文化コース・附属芸術文化センター

よって互いの不得意分野を補い合い、バランスのとれた事業の提供につながっていること、地域内外の人的・情報交流を発展させていることを明らかにしている。このような実践事例の検討を豊富化と成果を共有することで、公立文化施設と地域の演劇団体との連携が促進に貢献できると考える。

本稿では、宮崎県北諸県(きたもろかた)郡三股町にある自治体直営の「三股町立文化会館」(写真1)が長年実施している自主事業に着目する。隣接する都城市を拠点に活動する劇団「こふく劇場」(代表:永山智行)との協働による自主事業であり、事業の広がり、多様な住民の参画、三股町を超えた地域への展開と、様々な波及的成果を上げており、その協働の経緯と意義を検討していく。

II. 三股町立文化会館について

1. 宮崎県北諸県郡三股町概要

北諸県郡三股町は、宮崎県の南西部に広がる都城盆地の南東に位置する。町の約7割が鰐塚山系に囲まれ、豊富な地下水に恵まれた自然豊かな「花と緑と水の町」が、自治体のキャッチフレーズである。このような地形がもたらす恩恵と南国の温暖な気候を活かし、肉用牛を中心とした畜産が盛んで、そのほか多角的な農林業が行われている。

三股町の西部は、隣接する都城市の中心市街地と切れ目なく連たんしている。都城市は、宮崎県内で人口が2番目に多く、また比較的交通の便も良いため、三股町民は通勤、通学、買い物など日常生活を都城市に依存している。三股町の人口は25,470人(2019年3月1日現在)で、1971年以来減ることなく微増を続けている。町はその理由に、①乳幼児医療費の無料化・保育料の上乗せ支援など充実した子育て環境³、②移住者への交付金など過疎対策への取り組み⁴といった自治体の施策の効果、③1991年に都城市に宮崎産業経営大学経済学部が開設されたこと⁵、④比較的地価が安く、都城市のベッドタウンとして民間事業者の宅地開発が進んでいること、といった外的要因を挙げる⁶。

平成の市町村合併では、当時北諸県郡に属していた他の4町(山之口町・高城町・山田町・高崎町)は都城市と合併したが、三股町は単独町政を選択した。合併協議会への不参加を決定するとともに、2004年度を「行財政改革元年」と位置づけ、積極的に行政改革を進めてきた⁷。それを踏まえ現在は「自立と協働で創る元気なまち・三股」を掲げ、まちづくり

基本条例を制定し、協働意識の醸成を重要施策としている。

2. 三股町立文化会館沿革

三股町立文化会館は、2000年末に建物が竣工し、2001年11月3日に開館した。JR三股駅⁸から徒歩10分の距離にあり、途中には中央公民館、町役場、武道館など町立の公共施設が立ち並び、周囲には新興住宅と田畑が広がる。建物全体の名称は三股町総合文化施設で、三股町立図書館との複合施設である。大きなエントランスホールが図書館と文化会館を連結し、そこには「思い育み 知の創造」という理念が掲げられている。町民の創作への「想いを育て、知恵を出し合い、創り上げる」拠点でありたい、という設立の思いが込められている⁹。施設は三股町教育委員会の直営であり、図書館は教育課図書館係が、文化会館は教育課文化係が所管している。エントランスホール正面に文化会館事務室があり、町役場の行政職員が文化係として2名(係長職、主査)、委託契約のスタッフ4名で運営している¹⁰。

1978年に文化施設建設を求める住民の陳情が出されたが、会館オープンまでには20年以上の年月を要した。陳情後、町の具体的な動きは、ようやく1990年12月に「三股町文化施設建設基金条例」設置を決定、翌1991年に文化施設建設推進委員会、1992年に文化施設建設委員会が設置されて進められた。しかし、1994年に旧自治省「ふるさとづくり事業」に

表1 三股町立文化会館 沿革

1999年	12月三股町総合文化施設工事着工
2001年	3月三股町総合文化施設竣工
2004年	5月自主事業「演劇ワークショップみまた座、戯曲講座「せりふ書いてみる?」公募開始
2005年	3月みまた座第1回公演「隣の町」2回公演
2010年	9月町長選挙 木佐貫辰生当選
2011年	12月開館10周年町民参加創造演劇公演「おはよう、わが町」上演。
2012年	1月(財)地域創造「地域創造大賞(総務大臣賞)」受賞
2012年	6月戯曲講座のリーディング公演を第1回みまた演劇フェスティバル「まちドラ!」として開催
2016年	5月「まちドラ!」リーディング公演、日曜日は各作品、2回上演となる
2017年	1月開館15周年(2016年11月で15周年)記念公演「おはよう、わが町」上演
2018年	5月平成30年度宮崎県地域づくり顕彰大賞を劇団「こふく劇場」受賞

(筆者作成)

申請したものの、多額の建設費を投じて先の世代に負担を残してはいけないという「ハコモノ行政」批判の声も大きく、町民の意見は建設推進と反対に二分し、議会にも建設計画への慎重論が出ていた¹¹。1998年の選挙を経て新たに町長に当選した桑畑和男が、施設整備計画の見直しを進め、座席数413の小規模な多目的ホールと図書館の併設施設として、1999年10月に実施設計、2000年1月によく着工した。当初40億で始まった建設計画は、最終的に総事業費27億円に縮小された。

完成したホールは可動式座席の多目的ホールで、舞台は間口16~17メートル、高さ6.5~8m、奥行き11.5m、楽屋として和室、洋室をそれぞれ2室ずつ備えている。他に練習室(60m²)、会議室(44m²)がある。ホールの稼働率は、62-65%程度である¹²。

自主事業は、①鑑賞型の公演事業、②普及啓発・育成型のアウトリーチ事業、③普及啓発・育成型の講座・ワークショップ事業の3本柱で、公演では、音楽(クラシック、ジャズ、ポップス他)、演劇、伝統芸能のジャンルなど、年間18本程度の事業を実施している。公益社団法人全国公立文化施設協会が集約している2016年のデータのうち、町村等が設置運営する公立文化施設(204館)を見るとホール稼働率40.6%、1年間の主催公演事業数7.9件、年間公演回数12.7回、年間入場者・参加者数3,921人である。そのうち直営施設(156館)では、自主事業費約660万円、事業収入約325万円である¹³。それに対し三股町立文化会館は、2013年の数字だが、ホール稼働率64%、1年間の主催公演事業数23件、年間公演回数123回、年間入場者・参加者数5~6千人、自主事業費約1,200万円¹⁴、事業収入約400万円である。全国の町村立の文化施設と比較すると、ホール客席規模が小さいことから、事業数の割には集客によるチケット収入は小さいが、自主事業による活動は、非常に活発であること分かる。

Ⅲ. 劇団との協働による自主事業の展開

1. 人を育てる演劇ワークショップ「みまた座」

開館後3年目の2004年度から、自主事業として、ふたつのワークショップ事業が始まる。どちらも、都城市を拠点に演出家・劇作家として活動する永山智行が指導者として、また永山が代表を務める劇団こふく劇場メンバーが運営に参画しており、2019年現在まで継続している。そのうち一つは、小学生から高校生を対象とした演劇ワークショップ「みまた座」で、もう一つは年齢・経験を問わず参加できる

演劇講座「セリフ書いてみる?」である。2事業はそれぞれ独立した事業だが、講座参加者と戯曲作品が相互に交流するようになり、のちに「みまた演劇フェスティバル まちドラ!」へ展開していく。地元の演劇団体が長期にわたり公立文化施設の自主事業に参画して、参加住民を指導・サポートしたこと、演劇創造を通じて培った劇団のネットワークを活かすことで、公立文化施設のユニークな自主事業へと育っている。

子どもを参加対象とした「みまた座」は、文化活動を通じて人を育て、地域とホールが共に育つことを目的としてスタートした。開始年の「広報みまた」では「文化会館の個性を!」と題して、事業概要が掲載されている。記事は「人と文化がともに育つ未来を見据え、感受性豊かな成長期にある子どもの心の育成に視点をお」いて「長期的な人材育成事業」として構想したと説明する。また、「一つひとつの表現を模索し、共有することによって」演じるものも、見るものもともに舞台を作ることに参加できること、「人との関わりを探る行為であり、そこに明日を開く芽が宿っていく」のだ、と演劇活動の特徴を指摘する。さらに、事業を通じて、「町の子どもたちが、未来への芽となる心を育むこと」が、子ども自身だけではなく「町にとってもかけがえのない財産となるはず」だと主張する¹⁵。

この意欲的なステートメントは、町役場職員としてホール建設計画にたずさわって、2001年開館後は文化係長として文化会館の事業企画と運営を担った内村陽一郎の文章である¹⁶。内村は、年間予算約160億円¹⁷の町役場が、総額40億円を投じる施設計画に対して強い責任を感じ、単に舞台を鑑賞するだけの場所ではなく、町民にとって意味のある文化会館とするべきだと考えていた¹⁸。開館後の運営を進める中で、ホール施設にしかできない、地域にとって意味のある事業は何かを模索していた。

内村は、同僚にこふく劇場の前身「劇団クロスピア」のメンバーがいたことから、永山の舞台を見てはいたが、永山との面識はなかった。まず、こふく劇場の本公演を文化会館に招聘し、地元の創造集団をフランチャイズとして迎え入れた。稽古やりハーサルという演劇を作るプロセスを見ることが、会館スタッフにも役に立つと考えていた。また、三股町に他に劇団など演劇関係の活動者がいなかったことも重要な点だ。三股町内に音楽やダンスの教室を開設している指導者もいるので、一つの組織や個人を特別扱いするのは難しいが、演劇であれば、町民からの異論が出にくいという配慮もあった。永山とい

う指導者も得て、内村は子どもを対象とした育成事業を演劇で行うことを構想する。

人材育成事業を長期的に継続させるために、内村はみまた座の「開設要綱」を作成し、文化会館の自主事業における位置付けを最初から明確にした。要綱の第1条には、「子どもたちが、演劇を通して“表現すること”“創造すること”の楽しみを体験し、感性を磨き、心豊かな人間として成長していくこと」を活動の趣旨として掲げる。具体的な活動内容にも、演劇を作って発表するだけでなく、「舞台技術についての基礎知識、ホールボランティアとしての能力、これらの知識や能力を活かして、会館で実施される事業に参加すること」などが入り、参加者が文化会館の良き理解者として成長することが期待されている。さらに第3条には、「演劇監督」を置くこと、それが「劇団こふく劇場代表永山智行」であることが明記されている。経費についても、三股町の自主文化事業費として教育課文化振興費委託料から支払うと明記している。

1年目のみまた座は、町内の小学校5年生から中学2年生までを対象に、20名の定員で公募したところ、最終的に10名が集まった。毎週木曜日午後5時から6時半まで、永山やこふく劇場メンバーによる定期的な演劇ワークショップがあり、8月に中間発表、年度末3月に成果発表を行った。現在も毎年6月から3月までの間に、およそ60回程度のワークショップが行われる。2011年度8期生からは小学校4年生から高校2年生、16年目となる2019年度は「概ね」小学校3年生から高校2年生までを対象年齢を広げた。参加費として月額1,000円（保険代など）が必要である。発表公演は、300円だが入場料を取っており「子どもたちなりに責任を感じて取り組んでいる」と、内村はいう。発表公演のための作品は、もう一つの自主事業である戯曲講座修了生のうち三股町民が書きおろすことになっており、戯曲作品を介して二つの事業は連動するようになっている。近年は、みまた座を修了した高校生が戯曲講座を修了して、みまた座に書きおろすという循環が生まれている。

みまた座には2018年度の15期生まで、延べ241人の子どもが参加した¹⁹。毎年繰り返し参加する子どもや、姉妹での参加がある一方、異なる学校の異なる年齢の子どもと交流・協働する機会となっている²⁰。みまた座を修了した後も、学校帰りや学校への息苦しさを感じる時に文化会館事務室に立ち寄って、宿題をしたり、会館スタッフとおしゃべりをする者もいるという。文化会館には、職員数にしては広い事

務室が確保されており、通用口から入ると大きな作業机と大きなホワイトボードがあり、立ち寄りやすい雰囲気である。文化会館はみまた座の継続によって、家庭と学校以外の第3の場所という「居場所」の役割を果たすようになってきているのである。

2. 戯曲講座「せりふ書いてみる？」

みまた座と同じ2004年に始まった戯曲講座「せりふ書いてみる？」も、「地産地消」の演劇活動を展開したいという内村の提案から生まれた。毎年おおむね7月から翌年の1月まで、月1から2回2時間半の講座が全部で12回開かれ、永山の指導を受けながら戯曲を書いていく。対象は高校生以上で、経験・居住地は不問のため、都城市や小林市など宮崎県内の他、鹿児島県からの参加やみまた座に在籍していた高校生の参加もある。定員は6名程度と少人数で、2019年度の参加費は年間2,000円（高校生1,000円）と格安だ。

講座の内容は、①せりふってなに？②話すことばを書こう③会話を書こう④材料を集め、スケッチを書こう⑤俳優に読んでもらおう⑥構成を考えよう⑦最初のシーンを書こう⑧2番目のシーンを書こう⑨もう一度構成を考えよう⑩3番目のシーンを書こう⑪ラストシーンを書こう⑫俳優に読んでもらおう、と段階を追った実践的な内容だ。永山は、三股町のほか宮崎県内の複数の公立文化施設でこのような戯曲講座を担当している。

永山の包容力のある指導が、受講生の戯曲執筆完成までのモチベーションを支えていると思われるが、戯曲講座の魅力は何と云っても、書き上げた「せりふ」を俳優が舞台上で朗読してくれることだろう。完成した戯曲は、翌年度の5月か6月に、宮崎県等地元の劇団や高校演劇部の生徒たちによって、リーディング公演「ヨムドラ！（読むドラマ）」として文化会館ホールで上演されていた。戯曲を手を持ったままとはいえ、舞台上で照明や音響も使って演出されるリーディング公演は、「せりふ」を書いた受講生にとって、作る側の立場から「演劇」の醍醐味を経験できる。この「ヨムドラ！」公演が、2012年から文化会館を飛び出し、後述する「みまた演劇フェスティバル まちドラ！」へと発展する。

3. 町民参加創造演劇公演『おはよう、わが町』

子どもを対象としたみまた座の継続は、思いがけない副産物を生んだ。ワークショップに参加し、稽古が進み、本公演での発表を経た子どもたちの変化と成長ぶりは、会館への送り迎えを続け、本公演を

鑑賞した保護者たちを刺激した。子どもを変化させた演劇を自分もやってみたい、と仰いだす保護者が出てきたのである。2010年に内村に代わって、文化係長として異動着任した岩元勝二²¹は、10周年事業として「大人も含めた参加型演劇」を立ち上げたいと考えていた。永山に相談した結果、みまた座13期生に加えて、公募の町民が参加する演劇公演を企画する。永山は、アメリカの劇作家ソーントン・ワイルダーの『わが町』²²を原案とすることを提案し、昭和30年代から現代までの三股町の出来事や文化を織り込んで、「普通の人々の普通の暮らし」を表現することにした。全体の構成と演出を永山が担当、台本はこれまでの戯曲講座の受講生5人が書き上げた。18歳から77歳までの町民32人が舞台に立ったほか、音楽家や伝統芸能の保存会、宮崎県の劇団も参加した。全編三股町の方言の上演に、木佐貫辰生町長も町長役で出演した。

上演は、文化会館開館後10年間の人材育成事業の蓄積と成果として、会館スタッフならびに参加町民の満足度も非常に高かった。これら自主事業の成果が評価され、2013年1月、三股町立文化会館は一般財団法人地域創造の「平成24年(2012)度地域創造大賞(総務大臣賞)」を受賞する。地域創造大賞は、「地域における創造的で文化的な表現活動のための環境づくりに特に功績のあった公立文化施設を顕彰し、全国に広く紹介することにより、公立文化施設のさらなる活性化を図り、美しく心豊かなふるさとづくりの推進に寄与することを目的として、2004年度に創設されたもの」²³で、2012年度は全国から三股町立文化会館を含む7施設が選ばれた。宮崎県内の施設では初めての受賞となり、関係者の喜びも大きかった。『おはよう、わが町』には、再演を請う声も多く、2016年11月に開館15周年記念公演として改訂・再演され、台本には町民9人が、出演は30名の町民を中心に、県内外の劇団や音楽家など総勢80名が舞台に上がった。

4. 劇団こふく劇場と演劇ネットワーク

本節では、永山とこふく劇場の活動について振り返る。1967年都市生まれの永山は、高校時代に演劇を始め、演劇教育に熱心な東京学芸大学に進学する。卒業後は帰郷し仕事をしながら、1990年4月に高校時代の先輩後輩と劇団クロスピアを旗揚げした。1996年には、東京の「こまばアゴラ劇場」で公演、1996年、97年と2年連続で、永山の戯曲が日本劇作家協会最優秀新人戯曲賞の最終候補に残るなど、県外での演劇活動にも積極的であった。これらの活動

で得た手応えや、宮崎県内で長年活動を続ける劇団「ぐるーぶ連」²⁴の存在に意を強くし、永山は宮崎を拠点に演劇活動を続けることを決意する。1997年には職を辞し、劇団名を「こふく劇場」と改めた。2001年に、永山の戯曲『so bad year』が第2回AAF戯曲賞を受賞²⁵、全国の演劇関係者にも知られるようになっていく。2002年に北九州演劇祭、東京国際芸術祭に招聘された作品『やがて父となる』(劇団としては第6回公演)で、こふく劇場は独自の世界観を確立する。

永山は劇団の表現について、「いろんなことを試してみたが、結局「会話」「日常」という地に足を付けた表現に落ち着いていった」と語る。継続して所属する劇団員は5、6名と多くはないが、宮崎県内外の俳優や音楽家と共同して多数の舞台作品をプロデュース・上演してきた。その中には、障害のある人々と劇団との協働による演劇活動もある。2006年度から障害のある人とともに演劇作品を作る「みやざき◎まあるい劇場」というプロジェクトを企画し、2014年度まで複数の作品を県内外で上演している²⁶。また劇団としては、2008年、2010年、2012年の『水をめぐる』、2015年、2018年の『ただいま』では、全国各地を巡るツアー公演を繰り返し行っており²⁷、全国の小劇場演劇界ではよく知られた存在である²⁸。

永山とこふく劇場は、三股町のほか、宮崎県立芸術劇場、門川町総合文化会館でも戯曲講座や演劇ワークショップを指導するなど、宮崎県内の公立文化施設と連携した仕事にも携わっている。永山は、2006年から2016年まで、宮崎県立芸術劇場(運営は公益財団法人宮崎県立芸術劇場)の「演劇ディレクター」を務め、劇場の演劇事業のプログラム作りを担った。なかでも構成・演出を担当した「演劇・時空の旅」シリーズは、永山の九州における演劇ネットワーク拡充に多に貢献したと思われる。2008年度に始まった本シリーズは、九州各地で活動する俳優を集め、約1ヶ月の時間をかけて劇場で演劇作品をつくるという、参加俳優にとって充実した創造環境を提供するものだった。宮崎県立芸術劇場から県内外へ発信していくことを目的とした財団の自主事業であり、独自の舞台作品を自主企画制作する創造型の事業である。上演作品は、アリストパネス作『女の平和』(BC411年・ギリシア)、エドモンド・ロスタン作『シラノ・ド・ベルジュラック』(1897年・フランス)、アントン・チェーホフ作『三人姉妹』(1900年・ロシア)、ウィリアム・シェイクスピア作『フォルスタッフ/ウィンザーの陽気な女房たち』(1597年・イギリス)、井上ひさし作『日本人のへそ』(1969年・日

本), サミュエル・ベケット作『ゴドーを待ちながら』(1953年・フランス), ベルトルト・ブレヒト作『三文オペラ』(1928年・ドイツ)と, 演劇を学ぶには必須の名作戯曲が連なっている。地方都市の俳優にとって, 実際の上演を経て古典・近代戯曲を学ぶ機会となるだけでなく, 参加俳優同士の切磋琢磨, そして俳優たちが所属する複数の劇団間の相互交流の機会となった。この事業で築いた永山の人脈やネットワーク, 各地の演劇人との信頼関係が, 三股町での事業展開にも生かされていく。

IV. 演劇のまち「まちドラ!」へ

1. まちに広がるリーディング公演

三股町立文化会館の複数の事業がより合わされるように, 「みまた演劇フェスティバル まちドラ!」が生まれる。そのきっかけは永山が, 2011年9月に鳥取市鹿野町で行われた「鳥の演劇祭4」を訪ねたことだった²⁹。鹿野町の風情ある城下町で, 複数の建物を公演会場に開催される演劇祭にヒントを得て, 戯曲講座の発表公演(読むドラマ)を, 文化会館1カ所ではなく複数会場で上演することを思いつく。町内の公演会場間を観客が移動することで, 町には賑わいが生まれ, 三股町らしい演劇祭になると考えたのである。すでに, 毎年行っている戯曲講座のリーディング公演を面的に広げる発想だった。

この時文化係長の職についていた前述の岩元は, 文化会館オープン時は, 総務課広報係で「広報みまた」の編集を通じて文化会館の自主事業を見守り, 内村の文化事業に対する思いと責任感を継承して自主事業に精力的に取り組んでいた。内村は, 会館の担当職は離れていたが, 文化会館の自主事業を陰ながらサポートしており, 岩元は内村とともに, 永山のアイデアを具現化するべく, すぐに, 中央公民館や旧弓道場など, 文化会館から徒歩圏内の町立施設を会場として利用する調整を進めた。こうして, 「みまた演劇フェスティバル まちなかでドラマに出会える3日間!まちドラ!」が形になっていった。

2. 書く, 読む, みる, ドラマ

「まちドラ!」は, 主に「カクドラ!」「ヨムドラ!」「ミルドラ!」という3つのプログラムで構成・実施され, 現在は5月の最終週末金・土・日の3日間で開催されている。

(1) カクドラ! = ドラマを書くワークショップ

初日金曜日に, 文化会館で演劇フェスティバル開会セレモニーが行われた後, 永山の指導による「90

分で戯曲を書く講座」が開講される。予約申し込み制で, 受講生はわずか90分で, 劇作にチャレンジする。書き出だしの短い戯曲は, その後2日間の「まちドラ!」開催中に, 仮設野外カフェでこふく劇場の役者や宮崎の若手演劇人によってリーディング上演される。たった数分のせりふが, 役者たちによって生命を吹き込まれ, いかにも興味をそそる場面となって立ち現れる。何とも言えない面白さで, これをきっかけに戯曲講座に参加する人がいても不思議ではなく, また繰り返し戯曲講座に参加する人がいるのも納得できる。戯曲と上演の関係, せりふを描くことの難しさと面白さがわかる仕掛けだ。

(2) ヨムドラ! = リーディング公演

2012年から2019年までの上演作品, 参加者一覧を表4に示した。前年度の戯曲講座で完成した戯曲作品のうち3作品を公募の町民参加チーム(表の下端・網掛け)が, 別の3作品を九州各地の劇団・ユニット³⁰(表の上段)が上演する。演出は九州各地の演出家6人がそれぞれ担当する(表2)。一覧表から分かるように, 毎年, 福岡, 熊本, 宮崎, 大分など九州各地の劇団が招聘されている。これら6作品は3会場を使って1日目土曜日に1回ずつ, 日曜日に2回ずつ上演される(表3)。原作戯曲の長さにかかわらず, 上演は30分で収まるように, 6人の演出家に依頼されている。演出家は, 時には戯曲を書いた講座受講生とメールや電話でやりとりをしながら, 上演可能な長さに切り詰め手直しする。

演出家と町民チーム, および戯曲とその配役(人数), 参加する劇団・演劇ユニットと戯曲の組み合わせを決定するのは, 演劇祭ディレクターの永山だ。劇団・ユニットとして上演に参加し, 翌年にその劇団・ユニットから演出家が参加し町民チームを担当する, というおおよそのパターンが出来ている。

町民参加者は, その年の3月末を締め切りに定員20名で公募される。繰り返し参加する常連もいれば, 観劇して関心を持ち始めて参加したという人もいる。毎年参加希望者は増えているようで, 2019年は30名の応募があったという。町民参加者は, 4月から毎週1回永山やこふく劇場メンバーの指導を受け, 5月には3つのチームに分かれて稽古が始まり, 町外から招く九州各地の演出家の稽古は公演の1週間前から始まる。参加する町民の経験や個性, 演出家の作風や特色を熟知している永山による, チーム分けと演出家のマッチングが面白い。町民チームを担当する演出家は1週間, 劇団・ユニット単位で参加する九州の演劇関係者は, 公演前日から公演終了までの3, 4日, 都城駅近くのホテルに滞在する。

表2 ヨムドラ！参加者の構成

演劇創造の要素	参加者	意義や成果
戯曲・脚本	戯曲講座受講生 (三股町内外のアマチュア)	プロの指導を受け、戯曲を書く面白さ・戯曲と演劇の関係を学ぶ。
演出	九州各地の劇団主宰者や演出家	新しい試みとなり、演出家同士の切磋琢磨の機会である。
出演者	三股町民(公募) ・九州の劇団・演劇ユニット	町民はプロの指導を受け充実感を得られる。演劇関係者には、切磋琢磨、交流の機会である。

(筆者作成)

公演当日、観客は朝から夕方までの6時間で、これら合計6本の短い戯曲作品のリーディング上演を、6人の個性的な演出家による演出で次々と楽しむことができる(図1)。3つの会場間の移動は、二人のツアーガイドが誘導してくれる仕掛けとなっている。九州で活躍する俳優や音楽家がツアーガイドを務めており、会場への誘導のほか、開演前の作品紹介、終演後の演出家や戯曲作者の紹介などを和やかに進めていく(写真2・4)。

上演スケジュールは、野外の仮設カフェで休憩や飲食ができるように、組まれており、この時間帯に、90分で書いたせりふがリーディング上演される。

ヨムドラ！の会場は、「えき劇場(JR三股駅)」「あつまい劇場(旧商工会館、現在は、三股町まち・ひと・しごと 情報交流センター「あつまい」)」「ちゅうこう劇場(中央公民館)」の3カ所である。2009年に改装された三股駅には、賑わいづくりのために多目的交流ホール「M★ウィング」が整備されている。いずれも50人で満杯になる規模だが、座布団なども使って70名程度の座席が用意される。1日の終わりの上演になると、出演が終わった町民や劇団員も観客席に入り、会場は満員御礼の賑わいとなる。

表3 2019年3日間のまちドラ！スケジュール

DAY1:金曜日	17:30 オープニング	19:30 カクドラ！90分で「せりふ書いてみる？」	
DAY2 ヨムドラ！ 土曜日	えき劇場	C③14:30	F⑥18:00
	ちゅうこう劇場	B②13:30	E⑤17:00
	あつまい劇場	A①12:30	D④16:00
DAY3 ヨムドラ！ 日曜日	えき劇場	C② 10:30	F⑤ 14:00
	ちゅうこう劇場	E① 9:30	B④ 13:00
	あつまい劇場	D⑥ 9:30	A③11:30
		F④11:30	C⑥15:00
		B⑥10:30	E⑥14:00
		A④13:00	D⑥15:00

*表中 アルファベットは作品名(仮)を、番号は観劇順を示す。ツアーガイドが、上演順に6作品が鑑賞できるように誘導してくれる。(筆者作成)

(3) ミルドラ！＝招聘劇団による演劇上演

土曜日、日曜日の両日とも締めくくりは、文化会館ホールを会場に、県内外の劇団による優れた作品を招聘して、演劇上演が行われる。2019年は、九州ではなく三重県から劇団が招聘された。「ミルドラ！」だけを観劇する人もいるが、1日の最後の上演のため、ヨムドラ！の出演者、観客が次々と「わが町の劇場」と名付けられた文化会館ホールに集まってくる。日曜日の最終上演後は、全体を監修する永山と、参加演出家と町民参加者の代表が登壇し、3日間全体を振り返る「クロストーク」(写真3)が行われ、次年度の再会を期して大団円を迎える。

3. 地域住民・文化会館・劇団の3方よし

以上のように「まちドラ！」は、文化会館の自主事業である演劇ワークショップみまた座、戯曲講座、町民参加演劇『おはよう、わが町』の積み重ねが重層的に絡み合う事業として広がってきた。

「まちドラ！」の町民参加者は、年齢は10代から70代までと幅広く、老若男女が入り混じる。これまでに文化会館の自主事業に何らか関わってきた町民だけでなく、新たな仲間づくりのために参加した県外からの移住者、家族の介護疲れを紛らしたいという主婦、みまた座に参加していた子どもの変化に驚き自らも参加し、その後リピーターとなった父親もいる。多世代の多様な人々と演劇を通じて出会い、一つの舞台を作り上げる面白さを参加町民は味わっている。

リーディングという上演方法が、参加へのハードルを下げ、演劇経験の有無を不問にし多様な年齢層の出演を可能にしている。役者は劇団員であれ町民であれ、割り当てられた役のせりふを完全に覚える必要はなく、戯曲を手を持ったまま舞台上に立つことができるからだ。演劇初心者の町民もせりふを忘れ

るかもしれないというストレスや緊張を忘れ、舞台を楽しむことができる。30分という上演時間の短さは、観客や出演者への負担感が少ないし、観客は戯曲講座の成果をたくさん味わうことができる。

一方、リーディング公演は、県外から参加する演出家たちには、ほどよい緊張を与えている。小道具や舞台セットは、限られた予算の中での腕の見せどころでもある。上演会場は劇場ではないため、照明器具の数も限られているし、日中の公演なので完全な暗さは

作ることができない。限られた機材と素材での上演だからこそ、劇団や演出家の工夫が際立つ。6つの作品を見比べることで、演出家の力量や個性がよく分かる。おそらくそのことを最も意識しているのは、県外から参加する演出家や俳優自身だろう。良い意味でのライバル心が相互に働く。永山たちがそこまで狙っていたのかどうかは分からないが、結果として「ヨムドラ！」は、町民参加演劇を超えて、九州演劇人同士の交流と研鑽の場の役割を持つに至っている。

V. まとめ：公立文化会館と劇団の協働

本稿では、人材育成を目的とした文化会館の息の長い自主事業が結果として、多世代・新旧住民間の交流の場として発展し、波及的に九州圏内の演劇人・劇団の育成機能を果たすという複合的な成果を生み出していることを示した。都城市を拠点に全国的に活動する劇団のメンバー、劇作家・演出家が、自主事業の企画・運営における専門家として明確に位置付けられ、核となる町民の「演劇創造」（ここでは、戯曲、出演、演出）を支えている。町職員の行政運営に対する当事者としての強い危機感と、劇団の持つ創造集団ネットワークが相乗効果をもたらし、三股町立文化会館は町民にとって「わが町の劇場」へ成長している。また、行政担当職員と演劇創造の専門家（劇団や劇作家）との間の信頼関係が、柔軟な事業の発展を可能にしている。

永山は、常日頃から「計画は立てない、目的は作らない」と自分の姿勢を語る。目的を持つと、寄り道が無駄に思えるし、今あるものが見えなくなってしまうから、と言う。そんな永山と行政担当の2人3脚が、これまで事業の柔軟な推進につながってきた。「みまた座」や「戯曲講座」で生まれた作品や人間関係を基に、参加者のつぶやきを受け止め、手元にある限られた資源（人的ネットワーク、住民の文化活動、資金、情報など）を丁寧に拾い上げ、これらの接点をたくみにすりあわせて行く柔軟性と即興性が、事業の展開と波及効果をもたらしている。

以上から、本稿で取り上げた三股町立文化会館とこふく劇場の協働による文化会館自主事業「まちドラ！」は、以下の多面的な成果をもたらしているとまとめることができる。

①年齢性別・演劇経験の多様な人々が「演劇」を通じて集い、交流する場づくりができています。特に素人が戯曲を書き、そのリーディング公演を専門家と町民が実践するという、演劇経験や知識がなくても

参加しやすい仕組みが肝要である。

②参加する九州各地の演出家・劇団や演劇ユニットにとっては、研鑽とともに相互の交流を深める場となっている。必ずしも上手く書けているとは限らない、場合によっては荒唐無稽なストーリーの戯曲を与えられ、いつもの俳優たちとは違う多様な町民と1週間で公演を作るという複数の条件が、演出家たちにとっては、制約と同時に創造の可能性となっている。

③三股町立文化会館にとっては、新たな理解者・支持者を獲得する仕掛けとなっている。文化会館の建物の外で実施することにより、事業に参加する100人前後の人々（観客、出演者、劇団員、カフェ出店者など）が移動し、普段は静かな町の中を賑わせる。また三股町民だけではなく、宮崎県内、九州各地の演劇関係者から「演劇のまち」「演劇にとって幸せなまち」と言わしめ、文化会館の公共的な価値を高めることにつながっている。

このように町民、演劇関係者、文化会館の3方に多くのメリットをもたらしているこの協働事業を担う、人材、資金、場所について、以下のことが指摘できる。事業を担う人材は、町役場の担当職員二人と、地元の演劇人・劇団である。内村も岩元も、特に演劇好きというわけでも、特定の芸術分野への強い関心があるわけではない。数十億かけた施設を町民にとって、特に次代の子どもたちにとって意味のある場所にすることを考えていた。地元の宮崎県で優れた演劇活動をしていきたいという劇団と出会い、試行錯誤しながら事業をじっくりと進めきた。地域の適度な小ささや濃密な人間関係、小規模な自治体組織ゆえの柔軟さが良い方に働いたと考えられる。

「まちドラ！」は様々な波及的効果を生み出したが、その事業費は、三股町立文化会館の自主事業費年間総額1200万円のうちのごく一部（100万程度）だ。町外から招聘する劇団や演出家には、宿泊場所の提供と交通費が支給され、謝金もわずかだが支払われている。しかし、演劇関係者にとって三股町の「まちドラ！」は、是非とも参加したい演劇祭となっている。2日目土曜日の夜には、「ヨムドラ！」、「ミルドラ！」の演出家・出演者、舞台スタッフ、こふく劇場メンバー、東京からの常連演劇ライターや九州各地の公立文化施設スタッフなど、九州の演劇関係者60名が集う大交流会が開催される。そこでは、1週間滞在した演出家たちが、こふく劇場や宮崎の演劇人とともに滞在期間中に作った朗読劇が、余興として上演されるのが恒例となっている。都会を離れ、少し不便な街の滞在期間中に、次の作品や

連携のアイデアが生まれている様子がうかがえる。ある演出家は、町民との舞台作品づくりは何が出るかわからない緊張感と面白さがあると語る。もちろん、支払われる謝金が少ないよりは多いに越したことはないが、参加する劇団や演劇関係者は、「まちドラ！」が自らの演劇活動に確実に資すると考えているのだ。

上演場所は、いずれも町立の施設かもしくは町が設置に資金を投じた公共施設である。3カ所とも、舞台作品を上演するための施設ではなく、集会や展示などに使う平土間の会議室である。公民館とひと・まち・しごと交流センターでは、平台などを使い段差のある観客席が設置され、駅の多目的ホールでは舞台を高くして見やすく工夫されている。本格的な演劇を上演するとすれば、客席も舞台も設備も足りないが、そもそも朗読公演であることを考えれば、ちょっとした照明や小道具があれば、十分演劇上演の雰囲気生まれる。会場は、いずれも小さなスペースなので50人も入れれば満杯で、それだけでも祭りという特別感が増す。つまり、狭くて設備も不十分な会議室が、仕掛け次第で参加者がワクワクする演劇祭会場へと変化するのである。

三股町立文化会館は、責任感を持つ行政職員、地元の劇団、いくつかの空きスペース、数十万円の予算をもとに、「わが町の劇場」へと育ってきた。つまり、どこの公立文化施設にも、多くの住民が「わが町の劇場」と感じる場所へ変化する可能性が大にあるということだ。必要なことは、人材育成事業の継続と積み重ね、即興性と柔軟性に満ちた事業運営、それを支える行政担当者（劇場スタッフ）の公共的役割への責任感、そして演劇人が自分の持てる演劇の専門スキル（戯曲、演技、演出）を惜しみなく提供したくなる工夫に満ちた仕掛けである。

もちろん課題も残されている。現在の三股町立文化会館の自主事業は、特定の行政担当者に多くを負ってきた。町行政において文化会館（教育員会文化係）を明確に位置付け、適切な人材の配置が磐石なものとなることが求められる。また、地方都市の演劇活動団体が公立文化施設と協働し、多くの労力と時間を割き専門家として公共的な活動に従事しても、演劇活動だけで十分な対価を得ることが困難な現状は、改めて検討すべき大きな課題である。

謝辞

三股町役場職員内村陽一郎氏、同岩元勝二氏、こふく劇場代表永山智行氏には、貴重な時間をさいてインタビューに応じていただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

げます。

参考文献

- 赤木舞 (2017) 実演芸術団体による劇場・音楽堂等の運営に関する一考察：日本センチュリー交響楽団の事例を中心に『音楽芸術マネジメント』音楽芸術マネジメント学会 (9), 127-133.
- 赤木舞 (2013) 「公立の劇場・音楽堂等とオーケストラの連携に関する一考察：ミュンヘン・ザクセン・シムフォニーホールと東京交響楽団の事例をもとに」『音楽芸術マネジメント』音楽芸術マネジメント学会 (5), 49-57.
- 赤木舞 (2006) 「わが国におけるプロオーケストラと公共ホールの提携関係の現状と展望」『文化経済学』5 (1), 61-73.
- 桑原和彦 (2009) 「公共劇場とアーティストの協働」『演劇人025』(財)舞台芸術財団演劇人会議, 80-87.
- 松本茂章 (2016) 「官民協働で取り組む地域文化政策・小劇場を活力にした三重県の新たな可能性」公明党機関紙委員会 Komei 123, 56-62.
- 三股町史編さん委員会 (2019) 『三股町史 下巻』三股町
- 中川幾郎 (2009) 「公立文化ホールのマネジメント」小林真理他監修『アーツマネジメント概論 三訂版』水曜社, 307-316.
- 清水裕之 (1999) 『21世紀の地域劇場—パブリックシアターの理念、空間、組織、運営への提案』鹿島出版会
- 富本真理子 (2012) 「三重県における公共劇場間の連携の意義について：津あけぼの座/津あけぼの座スクエアと三重県文化会館を事例として」『文化政策研究』(6), 134-145.
- 矢野一誠 (2004) 『みやぎの演劇 1945～2003』鈺脈社
- 公益社団法人全国公立文化施設協会 (2016) 『平成28年度劇場、音楽堂等の活動状況に関する調査報告書』

付記

本報告は JSPS 科研費 JP18K00236 の研究成果の一部である。

注

- 1 公益社団法人全国公立文化施設協会 (2016) の調査結果によれば、2015年の実績で全国の公立文化施設（回答数1,239館）の1年間の自主事業による公演回数25.7回に対し、貸館事業は253.8回である。
- 2 赤木 (2013) は、ミュンヘン・ザクセン・シムフォニーホールと東京交響楽団、杉並公会堂と日本フィルハーモニー交響楽団など8事例を挙げており、そのうち3事例が関東圏以外である。
- 3 その他、子育て支援センター・ファミリーサポートセンターを開設している。
- 4 1997年から2011年までに、393人が三股町へ移住している。（広報「みまた」）

- 5 三股町役場からわずか3キロの位置に開設された。2004年に同経済学部は廃止されたものの、2009年には宮崎市を本部とする南九州大学の環境園芸学部が開設され、現在500名前後の学生が学んでいる。
- 6 「広報みまた」2012年6月号。
- 7 事務事業の見直し、組織機構の見直し(町立病院の民間への売却)、定員管理・給与の適正化、健全な財政運営の確立、行政の情報化促進、住民参加の促進と開かれた調整の推進という6つの柱を立て行政改革に取り組んでいる。
- 8 JR九州日豊本線の無人駅である。一つ隣の駅が都城駅で、1日の乗降客数260人程度。
- 9 三股町史 657ページ。
- 10 音響、照明など技術スタッフも別途、委託している。
- 11 談合をめぐる疑惑や建設費の圧縮、計画の見直しがあり、ふるさとづくり事業に申請したものの完成までに時間を要した。
- 12 2014年、2015年の実績数字。「三股町立文化会館運営委員会平成25年度会議[資料]」より。
- 13 公益社団法人全国公立文化施設協会(2016)30ページ。
- 14 開館以来、「文化会館自主文化事業」のための予算として概ね1,200万円前後が維持されている。
- 15 広報「みまた」2004年5月号2-3ページ。
- 16 内村は5年間文化係長を務めた後、別の部署に異動、2019年春に定年、現在再任用で三股町役場に勤務しているが、一貫して文化会館の事業をサポートしている。
- 17 2017年度の三股町の年間予算は、一般会計約100億円、特別会計・企業会計で約70億円、合計170億円弱である。建設中の2000年度も96億円と71億円、合計167億円と大きく変わっていない。
- 18 関係者への聞き取りを2015年2月(永山)、5月(内村、岩元、永山)、10月22日(内村)、2019年5月(内村)、参与観察としてまちドラ!(2015、2016、2018、2019年いずれも5月)、カクドラ!(2018年5月)、文化会館主催こふく劇場プロデュース公演(2015年10月22日)、『おはよう、わが町』(2016年11月)に実施した。
- 19 2017年度までで参加者実数は92人となっている。
- 20 町内には、小学校6校、中学校1校がある。
- 21 聞き取りでは、内村が文化会館を離れたのち、担当者が変わりみまた座などの育成事業はしばらく停滞してしまい、永山らが手弁当でみまた座の事業を持続させた「冬の時代」があったという。そこへ着任した岩元は、「活気や信頼で包まれていた」文化会館に戻りたいと奮闘し、その一つが『おはよう、わが町』であった。
- 22 1938年に書かれた3幕(「日常生活」「愛と結婚」「死と永遠」)構成の戯曲で、アメリカにある架空の街「グローバーズ・コート」を舞台に、登場人物の日常を描くことで「ありふれた日常」の重要性を浮かび上がらせる名作としてよく知られている。
- 23 一般財団法人地域創造ホームページより。
<http://www.jafra.or.jp/j/guide/independent/award01/>
- 24 1973年から、演出・構成の実広健士、女優の井上貴子を中心に宮崎県で活動を続けている。
- 25 愛知県芸術劇場の自主事業「上演を前提とした戯曲賞」として2000年に始まった。「戯曲とは何か?」をコンセプトに掲げ、大賞には50万円が贈られ、上演される。
- 26 明治生命保険の企業メセナとして実施された「エイブル・アート・オン・ステージ」にも参加し、東京公演を2度行なっている。
- 27 劇団こふく劇場ホームページ「過去上演作品」を参照。2008年京都、鹿児島、熊本、宮崎県内2カ所、鹿児島、2010年福岡2カ所、宮崎2カ所、大阪、東京、広島、2012年福岡、宮崎2カ所、東京、福島、広島、2015年宮崎2カ所、北九州、三重、愛媛、東京、2018年宮崎2カ所、愛知、三重、広島、札幌、福島、東京、沖縄で上演をしている。
<http://www.cofuku.com/kakosakuhin.html>
- 28 劇団こふく劇場については、公式ホームページ、『みやざきの演劇』、永山へのインタビュー、筆者自身の観劇をもとに記述した。
- 29 2011年の鳥の演劇祭において、こふく劇場は『土地/自傳』を上演した。演劇祭を主催するNPO法人「鳥の劇場」と永山は交流があり、他に、みやざき◎まあるい劇場(2013年、2014年)の上演、委嘱を受け戯曲『イワンのぼか』『古事記は歌ふ』を提供している。
- 30 主宰者がいて固定メンバーが集まって活動する「劇団」と異なり、公演の時だけ集まって上演を行うような緩やかな演劇集団を「ユニット」と呼ぶことがある。

表4 ヨムドラ！（下段網掛けは町民チーム出演作品、*は戯曲講座受講生）ミルドラ！作品一覧（筆者作成）

事業	ヨムドラ！ 作(*)は、三股町文化会館戯曲講座作品		ミルドラ！
会場	えき劇場 M☆ういんぐ (JR三股駅内多目的ホール)	よつかど劇場 (旧・三股町弓道場 2013/14年) ちゅうこう劇場 (中央公民館第1研修室 2015年~)	わが町の劇場 (三股町立文化会館)
2012年6月16日 (土)17日(日) 観客数：データなし	『静物画』作：小林恵子(*) 演出／飯屋園修太(劇団LOKE) 出演：劇団LOKE(鹿兒島)福園宏美・東別府夢・小湊有真・石守俊輝・西村学・飯屋園修太・前田茂喜(以上、劇団LOKE)・田中みづ(劇団XERO[鹿兒島])	『ボンノオト』作：廣畑明美(*) 演出／守田慎之介(演劇関係いすち校舎) 出演：いすち校舎[福岡]中川歩・松下龍太郎・高野由紀子・井中歩美・平林拓也・柳本あゆみ	劇団14+ 『土地戯曲』 作：永山智行 演出：中嶋さと(14+) [福岡市]
2013年5月25日 (土)26日(日) 延べ参加者数：821人	『PPP物語』作：内村慶舟(*) 演出／濱砂崇浩(劇団こふく劇場) 出演：町民A今元佑美・二見至紀美・外園杏里沙・中城清治・中村三和子・兼畑道彦(町民チーム)・+・假屋美千子(劇団こふく劇場)	『検流公民館』作：日高裕子(*) 演出／永山智行(劇団こふく劇場) 出演：原田富士子・藤迫和子・矢野智彦・下村友美・久保香菜美・別府勝子(以上、町民チーム)・町民B+かみもと千春・大浦愛(以上、劇団こふく劇場)	『霧がはればれ』作：石澤保(*) 演出／永山智行(劇団こふく劇場) 出演：町民C大村しのぶ・折田雅剛・中前みどり・今元里司・矢野和代・大村なつみ・福留憲(町民チーム)・+あべゆう・大迫紗佑里(以上、劇団こふく劇場)
2014年5月24日 (土)25日(日) 延べ参加者数：975人	『アンシーズナブル』作：二見至紀美(*) 出演：上野敦子(演劇カシモ[福岡])・永倉並沙美(劇団HallBrothers[福岡])・野中双葉(劇団ノリルモ[福岡]) 演出：山下キスコ(揮発タブレット[福岡])	『時をこえて～流れ星のキセキ～』作：大村美由李(*) 演出：森カタル・森タカコ・真島クミ・原原サチコ(劇団HITSTAGE[長崎県佐世保市]) 演出：田原佐知子(劇団HITSTAGE)	『BABUN』作：米澤裕美(*) 出演：片山篤郎(富む平原[宮崎])・川野誠也・富森慧子(以上、劇団風のしっぽ[宮崎])・伊藤海(Vaga8Ons[宮崎]) 演出：斎藤建郎(sputnik[宮崎])
2015年5月23日 (土)24日(日)	『ドはドーナツのド』作：丸山みどり(*) 出演：町民 今元里司・中前俊星・大村香菜美・兼畑匠牙・中村三和子・大村しのぶ・福留憲 演出：飯屋園修太(劇団LOKE[鹿兒島])	『シックスフィート』作：四位エリカ(*) 出演：町民 今元佑美・野島真央・矢野和代・大村美由李・樹田雅知子・大村なつみ・米澤裕美・矢野智彦 演出：大迫旭洋(不思議少年[熊本])	『F2F』作：吉野香織(*) 出演：町民 中前みどり・松山祐有美・別府敬太・黒島原理・折田雅剛・別府勝子 演出：守田慎之介(演劇関係いすち校舎[行橋])
2016年5月28日 (土)29日(日) 延べ参加者数：1,346人	『案内人のカルテ』作：折田雅剛(*) 演出：下水流いつみ(演劇制作ユニット 箱庭) 出演：演劇制作ユニット 箱庭[宮崎]有村香澄(劇団新世界)・伊藤海(演劇ユニットVaga8onds)・武田真依(演劇制作ユニット 箱庭)ほか	『めい(迷)』作：大村香菜美(*) 演出：日下渚(劇団水の中花) 出演：日下渚・清水りえ・矢田未来・政子友宏・篠原康平 劇団水の中花[大分]	『劇的たいむ』作：内木場康朗(*) 演出：川口大樹(万能グローブ ガラバコスダイナモス) 演出：樹木人・石橋達也・早稲寛貴・岡崎春香・山崎瑞穂
2017年5月27日 (土)28日(日) 延べ参加者数：1,269人	『まある』作：三桜(*) 演出：山下キスコ(揮発タブレット[福岡]) 出演：町民 中前みどり・樹田雅知子・大村香菜美・中城清治(以上、町民チーム)・大浦愛(劇団こふく劇場)	『シルバークレイド』作：内田敏幸(*) 演出：斎藤建郎(sputnik[宮崎]) 出演：町民 黒島原理・別府勝子・矢野智彦・今元里司・別府敬太・大村なつみ・矢野和代・中村三和子・藤永雅人(以上、町民チーム)・あべゆう(劇団こふく劇場)	『日々跨ぐ影』作：東彩晴(*) 演出：田原佐知子(劇団HITSTAGE[佐世保]) 出演：町民折田雅剛・大村しのぶ・野島真央・中前みどり・中村香織・今元佑美・福留憲(以上、町民チーム)・かみもと千春(劇団こふく劇場)
2018年5月26日 (土)・27日(日) 延べ参加者数：1,303人	『自由研究』作：中尾加奈子(*) 演出：橋本隆佑(超人気族) 出演：橋本隆佑・リン(以上、超人気族)・江尻圭佑(フリー)・金子愛里(空中列車)超人気族[北九州]	『ヒマワリ』作：折田香純(*) 演出：池田美樹(劇団きらら) 出演：森岡光・磯田沙(以上、不思議少年)・沼田徳馬(東海大学演劇部)池田美樹(劇団きらら)・濱砂崇浩(劇団こふく劇場)ほか	『お地蔵さん』作：河野誠(*) 演出：本田誠人(ユニットあんでな) 出演：川野誠也(劇団風のしっぽ)・樋口千穂(フリー)・本田泉(ユニットあんでな)・本田誠人(ベータン)・安田亨(門川！こふく劇場)・吉丸裕美(tick tack park)ユニットあんでな[宮崎]
2019年5月25日 (土)・26日(日) 延べ参加者数：1,352人	『友達配達人』作：坂上奈央華(*) 演出：福田修二(F's Company) 出演：篠崎雅・小山正平・松本 恵 F's Company [長崎]	『ハイ アークイブ』作：大橋雅奈美(*) 演出：後藤香(劇団 go to[福岡]) 出演：坂口琴美・嶋津絵美・的場翔平・神岡亮志(以上、九州ビジュアルアーツ[福岡])	『山田家の耳日曜』作：別府川間波(*) 演出：島田佳代(演劇集団非常口) 出演：友枝憲一・西和博・春田久子・西元麻子・春園由佳・平愛・石神朋子(以上、演劇集団非常口[鹿兒島])
2018年5月26日 (土)・27日(日) 延べ参加者数：1,303人	『嗚呼、此素晴らしい青春の日々』作：後藤慎太郎(*) 演出：川口大樹(万能グローブ ガラバコスダイナモス[福岡]) 出演：後藤慎太郎・大村香菜美・中村里桜・中村三和子・福留憲・別府敬太・樹田雅知子・吉行翼(以上、町民チーム)ほか	『いざかやせんせい』作：福島裕(*) 演出：本田誠人(ベータン[東京]) 出演：磯田 楓・磯口智美・今元里司・大村しのぶ・後藤慎太郎・中村三和子・藤永雅人・前田優香・宮田大輝・矢野和代・矢野智彦(以上、町民チーム)ほか町民チーム	『かなえ！』作：後久美里(*) 演出：池田美樹(劇団きらら[熊本]) 演出：磯田千穂乃佳・大橋雅奈美・中城清治・中城里菜・中前みどり・別府勝子・矢上沙梨央(以上、町民チーム)町民チーム
2018年5月26日 (土)・27日(日) 延べ参加者数：1,303人	『心にひまわりが咲くとき』作：天音(*) 出演：劇団天然木[熊本] 久枝しずく・久枝りんか・久枝咲二郎・枝崎 鷲・HISA(以上、劇団天然木)	『最後のリクエスト』作：内田里美(*) 演出：河野ミチユキ(ゼローン[熊本]) 出演：松岡優子・吉丸和孝・石井七実・木村想、他ゼローン[熊本]	『銀河伝説・第二話～言葉の星～』作：黒島原理(*) 演出：大迫旭洋(不思議少年[熊本]) 出演：不思議少年プレゼンツ、ちづる(ブルーエゴナク[北九州])・中村幸(劇団ヒロシ軍[長崎県])・ルーシー・ラブグッドウィル(劇団不在[大分])大迫旭洋・森岡光(以上、不思議少年)
2018年5月26日 (土)・27日(日) 延べ参加者数：1,303人	『良きことを聞か』作：甲斐菜々(*) 演出：福田修志(F's Company[長崎]) 出演：飯田辰美・後藤慎太郎・恒吉天音・中村里桜・藤永雅人・別府勝子・満留萌々子・原見佐利香(以上、町民えききチーム)町民えききチーム	『おかえりモモカ★生前葬』作：清水ひさし(*) 演出：島田佳代(演劇集団非常口[鹿兒島]) 演出：今元里司・黒木尚美・黒島原理・中城清治・中前みどり・別府敬太・樹田雅知子・矢野和代(以上、町民えききチーム)	『桜梅桃李』作：竹下純子(*) 演出：後藤香(劇団 go to[福岡]) 出演：町民 大橋雅奈美・大村しのぶ・大村なつみ・中村三和子・森代巳巳・矢野智彦・本村瑠菜(以上、町民えききチーム)
2018年5月26日 (土)・27日(日) 延べ参加者数：1,303人	『逃走から』作：森正太郎(*) 演出：荒木宏志(劇団ヒロシ軍[長崎県早市]) 出演：松永穂・森川松洋(カポド座[北九州])・荒木宏志(劇団ヒロシ軍)ほか	『ペンビンド寺子屋へ！』作：井上志保(*) 演出：泊篤志(飛ぶ劇場[北九州]) 出演：木村健二・葉山太司・中川裕可里・脇内圭介・佐藤恵美香・秋山実里・泊篤志(以上、飛ぶ劇場)・中村大介(ギター演奏劇団25馬力[宮崎県])	『戻りたくなる時間の中で』作：下沖悠人(*) 演出：穴迫信一(ブルーエゴナク[北九州]) 演出：吉元良太 演出：高野由紀子(演劇関係いすち校舎[行橋市])・多田香織(KAKUTA [東京])
2019年5月25日 (土)・26日(日) 延べ参加者数：1,352人	『森山家の人々』作：森代巳巳(*) 演出：高野桂子(PUYEY[北九州]) 出演：磯口千穂乃佳・岡井業理彰・後藤慎太郎・下沖悠人・中前萌々音・中前月那・中前みどり・樹田雅知子	『いつの日の出来事 Love to Love』作：黒島原理(*) 演出：伊藤海(劇団歩く窓.FLAG[宮崎]) 演出：池田帆乃華・磯口智美・今元里司・大村なつみ・黒木尚美・恒吉天音・恒吉音羽・中村海・藤永雅人・別府勝子	『ゴトを待ちながら』作：渡邊真美(*) 演出：河野ミチユキ(ゼローン[熊本]) 演出：大村しのぶ・折田雅剛・中城清治・中村三和子・中村里桜・森代巳巳・矢野智彦
2019年5月25日 (土)・26日(日) 延べ参加者数：1,352人	『明日からは無いもの』作：田代小夏(*) 演出：高野桂子(PUYEY[北九州]) 出演：高野桂子(PUYEY)・五島真澄(PUYEY)・小野真里愛・森一博	『アイちゃん』×不思議少年(熊本) 作：池田帆乃華(*) 演出：大迫旭洋(不思議少年) 演出：大迫旭洋・森岡光(以上、不思議少年)・宇都宮誠弥(飛ぶ劇場[北九州])・西村佳生(宇都宮企画[北九州])	『まもなく』×カミハマ演劇研究所(三重) 作者 演出：油田 晃 演出：川田 章子・岩田千鶴(カミハマ演劇研究所)
2019年5月25日 (土)・26日(日) 延べ参加者数：1,352人	『あらすじごっこ』×町民えききチーム 作：進藤藤乃(*) 演出：穴迫信一(ブルーエゴナク[北九州]) 出演：池田帆乃華・下沖悠人・中前月那・磯口智美・大村なつみ・別府琳太郎・下野子・兼畑道彦・恒吉天音・磯口智美・池亀遼	『ラッキーアイテム』×町民えききチーム 作：音壁雄(*) 演出：荒木宏志(劇団ヒロシ軍[長崎]) 演出：中川克己・中城清治・笠島幸代・中前みどり・今元里司・樹田雅知子・黒島原理・藤永雅人・黒木尚美・大村しのぶ	『ヘイコーヘイコー』×町民えききチーム 作：有村香澄(*) 演出：泊篤志(飛ぶ劇場[北九州]) 演出：田代小夏・中村里桜・山元聖也・矢野智彦・磯口千穂乃佳・後藤慎太郎・中村三和子・矢野和代・音壁雅子

